

# 『アイザック・アシモフの科学と発見の年表』の思い出

小山慶太

一九九〇年のある日のこと、毎月、丸善から送られてくる洋書の新刊案内を見ていたら、「Asimov's Chronology of Science and Discovery by Isaac Asimov」という本が目に入った。アメリカSF界の巨匠アシモフの手になる、「科学と発見の年表」である。

これは面白いに違いないと思い、早速、丸善から本を購入すると同時に、出版部（当時）の石寺雅典氏に翻訳権を得るよう、急いで交渉してほしいと依頼した。アシモフは邦訳が数多く出されている人気作家だけに、この作品もすでに他の出版社に押さえられているのではないかと心配したが、あに岡らんや、丸善で出版できることになった。

そこで、翻訳作業に取りかかろうとした矢先、運悪く、私は早稲田大学で教務主任という役職に就くはめになってしまった。講義の負担は少し軽減させてもらえたものの、学部の運営や大学行政にかかわる仕事がどつとふえ、アシモフとじっくり向き合う時間を割くのがきわめて難しくなってしまうた。

しかも、原書は四〇〇万年前の人類の二足歩行から始まり、一九八八年の遠距離銀河の発見に至るまでの歴史が収められた、大河小説<sup>①</sup>ならぬ、超大河年表<sup>②</sup>に仕上がっている。また、一般の年表のように年代ごとに項目だけが並べられているのではなく、各項目がコラム形式で綴られた、掌編<sup>③</sup>になっている。したがって、頁数も五〇〇を超える大著であった。そこで、同僚の輪湖博教授に後半部分を担当してもらうことにして、翻訳を開始した。

といっても、十分な時間を捻出できない事情は変わらないので、やむを得ず、次のような方法を取ることにした。原書をバラバラにして、毎日、数頁ぶんをポケットに入れ、大学に出勤した。そして、電車の中や仕事の合い間の細切れの時間、あるいは退屈な会議中などを利用して、破り取った頁の内容を頭に入れていった。年表の形式が各項目ごとの独立した掌編になっていることが、こうした作業するには都合よかったといえる。

そして、夜、その日のうちに、辞書や事典で不明な点を調

べ、読んだ項目を休日にまとめて原稿に起こしていったのである。

膨大な量の作品を残したアシモフは大変な「執筆中毒」で、ニューヨークの高層マンションに籠り、連日、ワープロを打ちつづけたというのが、私も一時期、休日はSFの巨匠に取り憑かれたように、翻訳の筆を走らせていた。

そのとき感じたのであるが、一人の作家のこれだけ大部な本と日々、付き合っていると、不思議なもので、アシモフの文章の癖や文体のリズムが自然とこちらにも乗り移ってくる。加えて内容が面白いだけに、校務の忙しさにもかかわらず、楽しみながら翻訳を進めることができた。

振り返ってみれば、我ながら相当な力業をやり通したものだと思うが、それもこれもまだ四〇代前半という若さ故であろう（いまではとても、そんな体力はない）。

さて、訳書は一九九二年七月、『アイザック・アシモフの科学と発見の年表』という書名で出版された（その三か月前、アシモフは七二歳で亡くなっている）。五五〇頁に及ぶ大判ハードカバーの本で、定価も七五〇〇円という高いものであった。

にもかかわらず——自慢話しめいて恐縮であるが——この本は版を重ね、よく売れた。書評にもずい分取り上げられ、好評を博した。

気をよくした丸善は一九九六年、定価を思い切って二八〇〇円まで下げた「コンバクト・サイズ」の廉価版を出した。

すると、これがまた、好調な売れ行きを示した。何かを調べするために引くというよりも、読んで楽しいというアシモフ流のスタイルが受けたからなのである（訳文がよかったことも一因ではなかったかと、私は勝手に思っているが……）。

ところで、私は二〇〇三年に『科学史年表』（中公新書）という小著を上梓した。こちらは一九〇一年のティコ・ブラーエ（天文学家）の死から二〇世紀末までの科学の歩みを、年ごとにコラム形式で綴ったものである。新書サイズであるから盛り込める内容はかなり制限されたが、手軽に読める科学史のガイドブックとなるよう、項目の選択と構成には独自の工夫を施したつもりである。

ノンフィクション作家の最相葉月さんが書評（『朝日新聞』二〇〇三年四月一三日）で、「アシモフへの敬意が感じられる年表」と拙著を評しているが、翻訳を通してアシモフと向かい合った経験がこの新書を生むヒントになったことは間違いない。なお、『科学史年表』はその後、二〇〇一年から一〇年までの項目を追加した『増補版』が刊行されている。

今年二月に出版された『35の名著でたどる科学史』を含め、私はいままで多くの本を丸善出版で書かせてもらってきた。それぞれに思い出があるが、忙しい校務の中で翻訳と格闘し、それが縁で自分の「芸域」を広げられたアシモフの本には、なんといつても一番の懐しさを感じている。

（こやま・けいた 早稲田大学名誉教授・科学史家）